

氏名	前田 豊
学位の専攻分野の名称	博士（社会学）
学位記番号	甲社第46号（文部科学省への報告番号甲第423号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2012年3月16日
学位論文題目	他者比較による階層帰属意識の規定メカニズム 数理的方法と計量的方法の統合をめざして
論文審査委員	（主査）教授 高坂 健次 （副査）教授 藤原 武弘 教授 渡邊 勉

論文内容の要旨

本論文は、「階層帰属意識」と呼ばれる社会意識の規定メカニズムを、地位の他者比較という観点から、実証的に解明しようとしたものである。データとしては「社会階層と社会移動」全国調査（1955年より10年ごとに実施；以下「SSM 調査」）を用い、分析方法としては数理的方法と計量的方法を併用することで両者の統合をめざしている。

第1章「先行研究のレビューと方法論」では、現在までに至る「階層帰属意識」概念の歴史の変遷を先行研究のレビューを通して概括し、階層帰属意識研究にとっては、他者比較メカニズムが理論的視座の中心に据えられるべきであることを述べている。また、数理的方法と計量的方法との間に介在してきた思想的対立を明確にしたうえで、本稿は「歴史理論としての数理モデル」という視点を採ることで両者を止揚しようとしている。

第2章「FK モデルの概略と課題」では、本論文の数理的手法の基礎となる Fararo と Kosaka によるモデル（以下、FK モデル）について概説するとともに、経験的妥当性の観点からの検討を行い、その問題点を明らかにしている。

FK モデルは、多次元的自己の階層的な地位を準拠点とした地位比較体系と客観的な階層構造に関する公理によって構築された数理モデルで、1975年以降不変的に観察されている階層帰属意識の「中意識の飽和」現象を理論的に説明したものであった。各階層次元の分布が独立で同一であるという条件を満たすとき、FK モデルが導く階層帰属意識分布が正規分布に漸近することについては、確率論の観点からも与謝野（1996）によって数学的に証明されていたが、SSM 調査データに基づいて検討を行ったところ、個人所得・学歴・職業威信の分布に関する同一性・独立性を全面的に認めるわけにはいかないことが分かった。この結果を踏まえ、アприオリに階層次元の分布特性を同定するのではなく、観察された階層次元の分布特性を柔軟に踏まえることのできるシミュレーション分析の必要性を指摘した。

また地位比較に関しては、同じ階層帰属意識の文脈で地位の他者比較を検討した実証的先行研究のレビューから、通時的に見る限り普遍的な規定メカニズムとしては経験的に支持されえないこと、ひいてはより体系的かつ包括的に地位の他者比較メカニズムの実証的な検討を行うことの必要性を指摘している。

第3章「他者比較メカニズム①——「誰を」「どのように」——」では、「どのように比較を行うのか」という他者比較の方法と「誰を比較対象とするのか」という比較対象の選定問題にアプローチし、地位の他者

比較メカニズムの経験的妥当性および特性に関して理論的検討を加えている。

他者比較の方法に関しては、他者との地位の違いを「差」で認識するのか、それとも「比」で認識するのかの違い、自己の地位を基準とした非対称的な比較を含意する方向性のバイアス、地位の距離評価に作用する地位関係のバイアスの3つの基底を想定し、加えて比較対象の認知の厳密さの違いから、あわせて25通りにおよぶ主観的地位評価指標の数学的導出を行った。

比較対象の選定問題に関しては、類似・近接性による選定原理を理論的背景に据えて、年代・職業・学歴・居住地域・日本全体を潜在的な類似・近接性検出次元と仮定し、それぞれの類似・近接性検出次元に対応する主観的地位評価指標群を個人所得レベルで導出した。

SSM 調査データの分析の結果、すべての年度で少なくとも1つの主観的地位評価指標が個人所得よりも階層帰属意識の説明変数として優れていることが示され、その効果も統計的に有意であることが分かった。さらに「中意識の飽和」現象が確認できる1975年以降では、自己よりも低い個人所得を持つ個人と比較を行い、その地位距離を過減的にとらえるような比較が(1985年を除く)すべての年度で妥当することも分かった。

また、個人所得を対数正規分布とみなし、パラメトリカルな数値シミュレーションを行ったところ、確認できた主観的地位評価指標の分布が対数正規分布と比較して安定的に歪みの少ない分布になることが示され、ミクロ・レベルだけではなく、マクロ・レベルにおいても階層帰属意識分布の説明因として望ましい特性を持つことを確認している。

第4章「他者比較メカニズム②——「誰が」「誰を」——」では、Yamaguchi (2002) が考案した「重みを課した説明変数による回帰モデル (regression models with parametrically weighted explanatory variables)」のアイデアを援用した重回帰モデルを用いて、複数の類似・近接性次元を考慮した「誰を」の問題と単一の階層次元上の階層的地位で識別される「誰が」の問題の2つの問題にアプローチしている。

結果として、前者の「誰を」に対しては、必ずしも通時的に単一の類似・近接性次元による比較対象が選定されているわけではなく、時代的に複数の次元にまたがって比較対象を選定しているという比較対象の多元化の傾向が確認された。しかし、「誰が」については、時代的には階層的地位で特徴づけられる個人間で比較対象や他者認識に違いが生じていて、時間的に共通した傾向は確認できなかった。

第5章「比較対象と比較方法を考慮した FK モデル」では、これまでの実証的分析から示された地位の他者比較に関する経験的事実と、新たに行った実証的分析の結果を踏まえ、それらを反映する形で公理の修正・追加を加えた「修正 FK モデル」を構築している。具体的には、類似・近接した他者に比較対象を限定し、さらに比較次元上で自己よりも低い他者のみに比較を限定するという比較対象に関する2つの公理と、自己の階層的地位集合の要素間順序に従って、他者識別を行う階層次元の順序を変えるというメカニズムを表現した修正公理を想定している。

こうした公理上の相違が生み出すデリバーションの差異を検討したところ、適用する公理の組み合わせによって修正 FK モデルとオリジナル FK モデルとでは、異なる階層帰属意識の予測値および異なる分布を導くことが理論的に明らかになった。シミュレーション分析の結果、前者については、修正 FK モデルがオリジナル FK モデルに比べて一定程度改善できた。しかし、後者の階層帰属意識分布についてはいずれのモデルも、正規性を特徴とする現実の階層帰属意識を再現することはできなかった。こうした点から、今後は他者比較以外のメカニズムにも着目する必要があることが示唆され、その点に今後の課題が残ったと結論づけている。

論文審査結果の要旨

前田豊氏の学位申請論文は、「階層帰属意識」をめぐる数理的方法と計量的方法とを統合しようとした

意欲的な研究である。具体的には、Fararo=Kosaka モデル（以下、FK モデル）の公理系のなかのいくつかについて、データ（＝SSM 調査）分析にもとづいて修正を施し、修正モデルのもとで再びデータ分析を通してモデルの検証を試みるという手法を採っている。その結果、一般化をめざす数理モデルを構築し、理論的予測対象となるデリベーションを行うという課題と、他方、歴史的変動の事実に対して綿密な計量的分析を行うという二つの課題を同時的に達成した点にオリジナリティーがある。計量分析による知見を数理モデルに生かし、さらに説明力のあるモデルと理論を構築していくという試みは、従来の階層帰属意識研究では十全にはなされてきておらず、その点において本研究は独創性のある研究となっている。全体としては水準が非常に高く、しかもまとまりをもった学位論文である。

本研究の貢献は、以下の3つの側面にまとめることができる。

数理的方法面での貢献

階層帰属意識を導出するメカニズム（地位関係を差で認識するか比で認識するのか、自己より高い地位の他者と比較するのか低い地位の他者と比較するのか、他者との地位関係を通減的にとらえるのか離散的状態としてとらえるのか）のタイプを網羅的に分類し、それぞれのタイプについて、モデルをつくり計量的に分析可能なかたちの厳密な定式化をしている。第5章のFKモデルの修正、展開は、計量分析によって明らかにされた知見を取り込む形で展開し、新たなデリベーションを引き出している。具体的には、「自己と類似ないし近接した他者と比較する」傾向を「検出パラメータd」の考案によってとらえることに成功し、社会学ならびに社会心理学において基本的理論である準拠集団論を念頭においたモデルの一般化を行った。また、数理モデルの構築の出発点となる公理系が、経験的データの精緻な計量分析ならびにシミュレーション分析を通して修正され発展されることの可能性と必要性についていわば「範型」を示すことに成功した。

計量的方法面での貢献

単に新しい方法を使うということではなく、数理モデルによって示唆された主観的地位評価のタイプを識別するために最適な計量的手法を選択し分析している。とくに、第4章の計量分析は、Yamaguchiの複雑なモデルを利用しながらも、自らの研究目的に照らして分析法を改良することで、独創的な分析を可能としている。また、モデルの最適判定基準についても、論理的に一貫した基準の構築を慎重に行っている。計量分析の方法的改良は、単に分析手法のユーザーとしてではなく、分析法を数理理論的に熟知していることを示しており、高度の能力の証左となっている。その結果、計量社会学単独の研究としても、先進的・意欲的な研究となっている。

階層帰属意識／階層研究面での貢献

階層帰属意識／階層研究においては、これまでともすれば乖離してきた数理的方法と計量的方法を統合する試みにより、階層研究の新たな研究の方向性と可能性を示した。階層研究では、従来説明よりも記述や解釈に重点がおかれ、アドホックな議論も多々見受けられた。またさまざまな新しい分析手法の実験場という側面もあった。それゆえ、階層研究は、理論やモデル、説明が不十分であることが指摘されてきた。そうした批判に対して、本論文は新たな可能性を切り拓いた。それは、計量分析によるモデルの公理の修正→数理的に厳密な評価メカニズムの定式化→定式化されたメカニズムの特定と検証、といった科学的営みのサイクルを達成した点で、従来の階層研究には見られない新しさがある。さらに、こうした新しさが、日本の階層意識研究の詳細かつ体系的なレビューの上に打ち立てられていることは、氏が今後階層意識研究の伝統と革新を一手に担う中心的な研究者になり得ることを示している。

もっとも、研究の更なる飛躍に向けての課題が本論文に残っていないわけではない。たとえば、他者との比較の次元として、階層内比較と階層間比較、上下比較に心理的近さ（親密性）を加味すればどうなるかなど「準拠集団論」の更なる深化を期待したい。また、本論文はデータの的には利用可能性の観点から専ら「SSM調査」データに依拠しているが、よりオリジナルな研究の深化のためには、独自の調査フレームのもとでのデータ収集、独自の要因を組み込み、独自の測定尺度も必要になってこよう。また将来的には、歴史的変動の説明に志向した近年の階層帰属意識／階層研究との「対話」も期待される。記述の仕方も、より広範な読者を想定するならば、既存理論の紹介、掲げられた図表についての解説、結果についての考察など、より丁寧で平易な表現も工夫しなければならない。

しかしながら、前田氏が本論文を後期課程3年間の在籍期間で異例とも言える速さでこれだけのまとまりと高い水準のものを完成させえたことは、瞠目に値する。本審査委員会は、本学位論文の内容と研究活動を慎重に審査し、前田氏が博士（社会学）の学位を受けるのに十分にふさわしいとの結論を得たのでここに報告する。